

任意整理は無理...?。破産申立てによる債務整理が増加中!

R.F.C

リスク・カウンセラー & ファイナンシャル・カウンセラー

Information & Report

2005.06.16 Vol.2005-06

十年前の倒産処理は任意整理が多かったが...

平成の初めの頃から約一七年間にわたり「リスク・カウンセラー」として多くのトラブルの相談を受けてきた。相談にいらした方は、親戚間で争いになっている相続の問題、隣地との不動産のトラブル、会社内の造反役員のもめ事、多重債務で苦しんでいる自営業者、バブル崩壊後の経済不況により倒産の危機に直面している経営者...など内容は多岐にわたっている。

カウンセラーの仕事をはじめた頃から記録を整理するため何冊ものファイイルを開くことになった。まだバブル経済が弾けていなかった株や不動産などの投資熱が全盛の頃の記録。同じようなバブル崩壊直後の記録。同じような相談案件でも四、五年毎でその状況は大きく変わってきている。債務超過の中小企業経営者の相談でも、債務整理の処理にあたる弁護士の方の方向性が大きく変わってきている。

バブルが崩壊してから数年間の傾向は、日本の経済界そのものが経験したことのないような事態が続くことになり、特に手持ち資産の評価額が急減したり、現物を背景とする資金繰りの行き詰まり現象によるものだった。

【たぐひと感懐記】

今年の果物地方は九州が早く梅雨入りとなった。梅雨入りしたばかりなのに熱中症で倒れる人が出るほどの暑さが続く異常気象の年だ。春先に香りを放って咲いていた梅の枝には収穫間近の青梅が膨らんでいる。白い花を咲かせていた雨天やヒラカサにもつとりと小さな実が...

事務所近くの街路樹の間に、何故だか分からない大きな一本の枇杷の木がある。果実として栽培されている訳ではないのでゴルフボールよりやや小さめだ。近くによって見上げると、厚い葉に包まれるような黄金色の果実が枝を垂れている。枇杷の種は万病の薬になる。一昨年は蜂蜜漬けを造ってみたい。行きつけの果実店に立ち寄って枇杷を買って帰るとした。(細野)



余りにも急激な変化であったが、資産のあった企業は、会社所有の証券や不動産を売却して凌ぎながら、倒産させずに何とか危機を切り抜けることができた。それでも足らなかつた場合はオーナー自身の所有資産を売却することで耐えてきた。

一方、資産を所有していなかつた企業は、売上が激減した時点で資金繰りが行き詰まり、リスケ(借入金返済の猶予)やリストラを断行。それでも資金繰りができなくなる企業が続出。決断の早い経営者は、再起の希望をもって潔く弁護士に倒産の手続きを委任していた。

その頃に行き詰まる企業は債権者の大半が金融機関であるケースが多く、仕入れ関係の取引先もバブル崩壊の経済背景を周知していたので、倒産することに対してはそれほど酷い追求はなかつたようになり記憶している。当時作成した債権者リストを確認したが、街金融や「恩借り」などの難しい債権者の名前はなかつた。だから、殆どが任意整理で会社整理ができていたのだらう。

弁護士にその時期の会社整理の処理方法がどうであったかを尋ねてみると、やはり九割以上が任意整理によって手続きを済ませていたというので、私の関わった相談の記録と同様であつた。

長引く不況に疲弊して、頑張りすぎた経営者の結末

この数年の債務超過関係の相談者がたどる結末を見ると、整理の約九割が破産申立てでなければ始末がつけられないような事例が顕著に増加している。それだけの事例はもともと破産にせざるを得ない背景はさまでまだ、原因は、政府指導により金融機関の不良債権処理が一気に加速化したことだと考えられる。

特に、中・小・零細企業は創立当時から取引をしている地元にある銀行や信用金庫などの金融機関を、自分の会社の「メインバンク」と位置づけ、頼りにもしていた。だから支店長や担当者とも親密な関係を保つよう努力していった。経営者もそうだが金融機関も同様に地域の行事などに参加協力をしてお互いが無理を云つたり無理を聞いたりの関係を続けてきた。

ところが、金融機関の再生の一環で統廃合され、各金融機関や支店で抱えていた不良債権処理が一気に表面化した。政府金融庁の資金支援を受け、金融機関が持つていた不良債権を債権回収会社に売却することによって、金融機関は自ら不良債権をもたないスリムな状態にすることができた。

しかし、中・小・零細企業にとつては、債権回収会社から有無を言わせぬ取り立てが始まることとなった。バブル崩壊の初期を乗り切ってきた企業までもが、いつの間にか不良債権の対象となる不良融資先企業になってしまった。

そんな訳はない...と金融機関の対応に戸惑いながら望みを託してはかたりにも現実を理解するまでにはかなりの時間が必要であった。現実を理解するまでの間に、とりあえず窮状を切り抜けるために親戚、友人、商工口関係や消費者金融、挙げ句の果ては裏金融のトイチ金融にまで手を出してしまつたり...。

金利支払いに負われる日々で、事業どころではなくなっている状況で相談

破産整理と免責決定で、健康な身体で再起への一歩を!

任意整理と破産整理の大きな違いは、債権者に対して残った債務の免責が得られるかどうかだ。個人や企業の債務を任意整理で片付けられたのは、債権者が債務整理による配当が決定した後、残債務を債権放棄してくれるという裏付けがあつたからで、債権者もそれなりに穏便に取りはからつてくれたからだ。

しかし、最近の相談者から提出される債権者リストをみると、どう見ても債権放棄を受諾してくれないような債権者ではないのだ。だから...このような事例は必然的に「破産整理」の方向で手続きをすることになるのだ。

「破産整理」が急増している原因は、とくに「倒産分岐点」を超えているのに、絶対に借りてはいけぬ融資先から借金して会社経営を続けてきたからなのだ。

さつぱりと「負の資産」を整理して、頭の中でグルグル回転していた資金繰りの回転車を早く消せば、心が軽くなり生活習慣病も改善され健康な心身に戻るはずだ。



街路樹に混じって育っている枇杷の木にはびっしりと黄金色の果実が熟している。どんな味なのかが気になるのだが...たぶん甘くないかも?

山高きが故に貴からず、 樹あるを以て貴しと為す。

「高い山だからと云うだけでそれを立派だと見るのはどんなものか…。それよりも、緑の葉が生い茂る大きな樹々がしっかりと根を張り、土中には豊かな水を蓄えていてこそ、本物の山として立派なのだ…。」という意味で、昔、子供達が寺小屋で勉強したときに、一番初めに朗読していた「実語教」という教典の教科書にも書かれていたそうです。

最近になって、自分が「清算貸借対照表」に関する資料をまとめる機会が多くコツコツとキーボードを叩いているうちに、じわ〜っと思い出してきた文言なのです。

ずいぶん前にこの文言を聞いた時のことです。寺小屋で教本台を前に背筋を伸ばして正座した小さな子供達が、みんなで声高らかに朗読していた文言であるを知ったとき、なぜかとても自分が恥ずかしくなった記憶がよみがえってきたのです。

自分が会社を起こしたときも、如何にして大手企業との取引を始められるようになるか、それにはどうするか…が、自分なりに大きな課題であると信じて事業の拡大に取り組んでいました。

資本金200万円の株式会社の設立は、本を見ながら公証人役場や法務局へ行って登記申請し、木造アパートの2Kの部屋を事務所として借り、廃車予定のサニーバンを8万円で車検を取ってもらい、机と椅子を揃えて手元に残ったのが50万円足らず…という状態のスタートでした。

でも、自慢だったのは経理の帳面も毎日こまめに記帳していたことでした。1円の計算が合わなくても気になりました。買い物するのも手元の現金を確かめてからでした。預金通帳の残高が少しずつ増えていくのが楽しみでした。

大手企業との取引口座も順調に推移し3年後には10億円ぐらいの売上になっていた。

そして10年後、整理せざるを得なくなった頃の自分の会社は、売掛金残高も、在庫も、仕掛品も…、いったいいくら金額になっているのか、社長の自分には正確な金額が分からなくなっていました。工場の在庫品にしても、すぐに納品でき

リスク・カウンセラー奮闘記

てお金に替わるものなのか…、それとも、それは不良品であっても再生して商品することはできないものなのか…、現場の担当者に尋ねても明確に分からなかった。責任者の考えでは再生することは手間がかかり、かえって費用がかさむから…という意見であったのです。それも一理あったのでしょうか…。
「もったいない」ような事が沢山あったと記憶しています。

営業の売掛金にしてもそうでした。納品して売上計上した後不良で返品されていた商品が、何ヶ月も処理されないまま売掛金のまま計上されていたのです。

いま思うと、それらの問題の一部が露見したときに徹底的に資産を洗い出し、本当の資産を確かめておくべきだったのですが、金融機関からの借入計画などを考えると、財務の修正処理ができなかったのです。知っていながらそのまま放置していたことを深く反省しているのです。

他山の石、以て玉を攻くべし。

自分の会社を整理してからすでに17年が過ぎた今、債務超過に直面している中小企業経営者と打ち合わせをするときには、恥ずかしい自分の話を敢えてするようになっています。年商30億円(月商2億5千万円)の売上があったにも関わらず、清算後の資産が1億円を下回っていたと知ったときには自分にとっては衝撃的でした。

いま、私が機会があるごとに「清算貸借対照表」の話をしなければ…という気持ちに駆られているのは、自分の悪しきあの行為を「清算貸借対照表」を通して伝えていかなければならない使命があると感じるからです。

「会社倒産という結果を招いたことで多くの人々に迷惑を掛けた事への償いの行脚」というと余りにも格好が良すぎるのかもしれないね。

自分が誤ってしてきた行為を、明らかにすることによって、中小企業経営者の一人一人に問題点を理解していただき、決して同じ轍を踏むことの無いようにと願いつつ、日々精進していきたいと思っています。

中身が脆弱だった会社が、どんなに会社を大きく見せたところで、基盤がしっかりとした企業と競合することは、無意味な挑戦をしていたと云うことだったのです。

それは正に「^{どうろう}蝸^{ひじ}螂の臂を怒らして、以て車轍に当たるがごとし」と云う言葉のように、カマキリがいくら大きく釜を立てたところで、車にはひとたまりもなかったのですね。



家庭菜園のキュウリもミニトマトも梅雨明け頃には食べられるようになってきていることでしょう。

大阪ビジネス会計人クラブのご協力により、当社ホームページをリニューアルしています。少しずつ充実してまいりますので、ご感想やご意見をぜひお寄せ下さい。
「癒しのサロン《ほろほろ》」には、読者の方々の作品を掲載してまいりますのでご投稿をお待ちしています。

